

---

# けいおん！ 桜

レイン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！ 桜

### 【Nコード】

N4266N

### 【作者名】

レイン

### 【あらすじ】

桜ヶ丘高校に入学した普通な少女、天野<sup>あまの</sup> 桜<sup>さくら</sup>が友人の梓と共に軽音部に入部するお話。

キャラ崩壊などがあるかもしれませんが、ご注意を

## 第一章 入学！（前書き）

なんか書いてしまった。

反省はしてない。

恋「なにをやっているんですか……」

あつ、君はあつちの主人公なんだから出てきちゃ駄目でしょ！

まあそれは置いて、連載中の小説があるにもかかわらず始めたので、こちらの更新は遅いと思います。

それでも読んでくださるかたは生暖かい目で見守ってやってください。

## 第一章 入学!

桜が咲き乱れ、新入生で賑わうこの季節。  
私はとある高校に来ている。

「桜。あつた?」

「……あつたよ。梓は?」

「私もあつたよ」

「そう、よかつた」

今日は高校の受験合格者の発表の日。

そして私、あまのさくら天野桜と友人のなかのあずさ中野梓のさくらがおかこうこう桜ヶ丘高校への入学が決定した日。

「そういえば、お母さんが『二人が受かっていたらお祝いパーティー

ーしましょう!』って言うってたから、梓も来る?」

「そうなの? うちもお祝いするって言うってたからわからないけど」

「そう。なら家も隣だし一緒に祝いする?」

「うーん。お母さんに聞かないとわからないけど、そうしたいかな」

「わかつた。お母さんに言うておくからOKだったら連絡して」

「うん。わかつた」

そんな会話をして私は友人と家路についた。

「そういえば、桜は部活どうするの?」

お祝いパーティーが終わって後片付けをしている時に梓が話しかけてきた。

「……部活？」

「うん。私はジャズ研に入ろうかと思うんだけど」

「……私は軽音部かな」

「桜はギター上手いからね」

「梓だって上手だよ」

「……桜と比べたら全然だよ」

「でも……うーん、わからない。部活紹介を見てからかな」

たしかにギターは好きだけど、もしかしたらもっと楽しい部活があるかもしれない。

そんなことを思いながら1日が終わった。

入学式当日。

校長先生の話は全国共通で長いのか、なんて思いつつ入学式の日は終わる。

次の日はクラス発表。

梓とは同じクラスになった。

「あ、桜もこのクラス？」

「……うん。よろしく」

正直に言う唯一の知り合いである梓と同じクラスで良かったと思っただ。

その後、梓と他愛もない話をしていると声をかけられた。

確か受験合格発表の日にハイテンションな家族といった子だ。

「私は平沢憂ひらさわうれいって言います。これからよろしくお願いします」

「私は中野梓。よろしくね、平沢さん」

「……天野桜。よろしく」

そんな感じで平沢さんと友達になった。

入学したてなので今日はとくに授業はなかった。

放課後。

この後はどうするか、中庭で梓と話していた。

「私はジャズ研に行ってみようかなって思ってるんだけど、桜はどうする？」

「……私は」

そこで私は言葉を失った。

なぜなら、変な着ぐるみを着た四人組がいたからである。

「……………」

「なにあれ……………」

変な着ぐるみの集団は新入生にチラシを配っていた。

「軽音部です。良かったら見に来てねー」

……………あれが軽音部……………

私達が啞然としていると、平沢さんがやってきた。

と思っいたらいきなり鶏の着ぐるみを着た人が平沢さんに駆け寄った。

「うーいー!!」

「あ、おねえ……………ひいっ!?!」

平沢さんは一瞬嬉しそうにしたけど、すぐに怯えて逃げてしまった。そりゃそうだ、あんなのが急に走ってきたら私だって怖い。

「あの……」

平沢さんが逃げた方を見ていたら、馬の着ぐるみを着た人に話しかけられた。

「軽音部です。良かったら見に来てね」

そういつて私達にビラを渡し、丁寧にお辞儀をして戻っていった。

「「……………」」

私達は何も言わず固まっていた。

「……………本当に軽音部に入るの？」

「……………新入生歓迎会を見てからかな」

「そ、そう。じゃあ私はジャズ研を見てくるね」

「うん」

そういつて梓はジャズ研に行った。

あの後、特にする事もなかったので、適当に歩いてから（軽音部には怖くて近寄れなかった）梓と合流した。

「……………ジャズ研、どうだった？」

「どうもこうも、単にジャズを研究するだけで演奏はしないみたい」  
梓はがっかりしたように言う。

「じゃあジャズ研には入らないの？」

「演奏しないしね。私も桜と一緒に新入生歓迎会を見てから決めるよ」

「そう」

そんな会話をして私達は講堂に向かった。

## 主人公設定（前書き）

今後変化があるかも。

一作目、三作目との関連性追加。  
今後クロスするかも。

## 主人公設定

### 主人公設定

名前 天野 桜

読み あまの さくら

身長 149cm

特徴 黒髪長髪。昔の友達と被るといふ理由でサイドテールにしている、太陽の髪飾りをしている。目は眠そうな目をしていて薄緑、胸はつるぺた。

性格 物静か、おとなしい、冷静なツツコミ役、絶対音感。

好きなもの たい焼き 曲 友達

嫌いなもの 怖い話・事

学力 優秀

パート ギター 青色のストラトキャスター

その他 ギターの腕は梓より少し上手いくらい。  
ちなみにドラムも少しできる。

絶対音感を持っている。

そのため作曲をしたり作詞したりもする。

皆があまりにもふざけると怒る。

梓と同じく猫娘。

梓よりもやや猫度が高め。

その先輩は文月学園という所に行ったらしい。小さい頃からずっと一緒に遊んでいた友達だったが、高校に入ってそれぞれ別の高校に行ってしまった。

今でもたまにメールとかしているらしい。

## 第二楽章 入部！

新人生歓迎会を見るために梓と講堂に来ていた。だがイマイチぐつとくるようなのはなかった。そんなことを思っていると、横から声をかけられた。

「あれ？ 天野さんに中野さん」

「……平沢さん？」

「天野さんたちもお姉ちゃん達のライブを見に来たんですか？」

「お姉ちゃん？」

「はい！ 私の姉がギターボーカルをやってるんです」

平沢さんは嬉しそうに言う。

知ってる人がこういうのに、ましてやメインをやっていると嬉しくなるのは分かる気がする。

【続きまして、軽音楽部によるクラブ紹介とライブ演奏です】

どうやら始まるようだ。

「どうもー、桜高軽音部です」

この声は……さっきの鶏？の人かな？  
それから鶏？の人はMCをしてから

「それでは聞いてください！ ふわふわ時間<sup>たいむ</sup>！」

そういつて演奏が始まる

〜  
〜  
〜

曲が終わって、  
すごく上手いという訳ではないのだけれど、  
なんとというか楽しそう  
だった。

そして新人生歓迎会が終わってから梓が、

「私、軽音部に入るよ」

「……急にどうしたの？」

大体予想はできるけど

「さっきのライブに感動っていうか」

私と同じだね。

「……じゃあ、一緒に入部する？」

「そうだね」

そんな感じで軽音部に入部することになった。

次の日の放課後。

私は入部届けをもって音楽室に向かう。  
梓も同じく入部届けを持っている。

部室前までやってきたけれど、

「……………」  
「桜、どうして私の後ろに隠れてるの？」

昨日の着ぐるみがまだ少し怖いからなんて言えない。

「……………とにかく入る」

「う、うん」

梓に扉を開けさせる。

開けた途端に中の人がこっちを見る。

「あの……………すみません……………」

「軽音部ってここですか？ 入部希望なんですけど……………」

「……………」

なんで黙るんだろう？

「確保ーっ！」

「きゃあああぁっ！？」

カチューシャを付けた人とギターの人が飛び掛ってきたので私はそれを避ける。

「あだぁっ！」

「り、りっちゃん！」

「は、離してください〜！」

「避けるなよっ！」

「……………いきなり飛び掛ってくるほうが悪いと思っ……………んですが……………」

その後、黒髪の人が二人を抑えた。

「ようこそ軽音部へ！」

「ほらこつち座って座って」

少し落ち着いてから私と梓は椅子に座った。

「お名前は何ていうの？」

「あ…中野…」

「……天野桜」

「パートは何やってるの？」

「あ…えっと…」

「……」

「誕生日は？血液型は？」

「……」

「好きな食べ物は？」

「えっと…あの…」

「……」

ギターの人とカチューシャの人が質問攻めをしてくる。

梓は困惑してしまっていて、私は名前だけ答えて黙ったまま。そんな一度には答えられないって。

「落ち着けお前ら」

黒髪の人が二人をたしなめる。

「えっと、一年二組の中野梓といます。パートはギターを少し…」

「……一年二組の天野桜です。パートは同じくギターです」

「ギターが二人か、幅が広がるな！」

「よろしく願います」

「……よろしく願います」

「私は平沢唯だよ。よろしくね！梓ちゃん！」

「よろしく願います。唯先輩」

「唯先輩……」

「秋山澪です。よろしくね、二人とも」

「……よろしく願います。澪先輩」

「澪先輩……」

あ、澪先輩がトリップしてる……

先輩って呼んだからかな？

唯先輩もトリップしてるし……

「おい、帰ってこーい」

「はっ！」

あ、帰ってきた。

「とりあえず何か弾いて見せて」

「まだ初心者なので下手ですけど……」

唯先輩が自分のギターを梓に渡す。

あれって確か重くなかったっけ。

あ、重そうにしてる。

というか梓の実力は初心者ではないと思うな。

「大丈夫！私が教えてあげるから！」

「お、早くも先輩風吹かせてるな」

「それじゃ……」

梓が演奏を始める。

梓、使い慣れないギターでそこまで弾いという初心者かどうかと思うよ。

澁先輩と唯先輩が固まっていた。

まさかとは思いつけど自分より上手いなんて思ってたたりして…

「ごめんなさい、やっぱり聞き苦しかったですよね…」

「あ、いやそういうわけじゃ…」

「ま、まだまだだね！」

なんか動揺してない？

というかなんかテニスを思い出した。

「次は桜ね、はい」

そういつて梓から唯先輩のギターを渡される。

「…う…重っ…」

私のギターよりも重いのでついそう思ってしまった。  
実際は別に重くないんだけど。

「…よいしょっ」

掛け声をかけてギターを持つ。

「…えっと、翼を下さいでいいですか？」

「ああ、なんでもいいぞ」

「…では…」

そういつて私は弾き始める。

〃

…こんなものかな？

終わったので皆を見るとまた固まった。  
梓も固まることはないと思うけど。

「…すごいな…」

「まさにプロみたいだったな…」

「凄い！ホントにプロみたいだったよ！」

「…あ、ありがとうございます…」

あまり褒められたことが無かったので、少し照れる。

「…すごい大型新人が入ってきたな！」

あまり過大評価されても困るけど。

「あの、私、もう一度唯先輩のギターを聞きたいです！」

「えっ!?!」

さっきの反応から、やりづらそう。

「えっと……ライブのせいでギックリ腰になったからまた今度ね！」

ギックリ腰……? ?

「もういいからどいてろ」  
「あーん」

唯先輩がカチキューシャの人にどかされる。

「とにかく、入部してくれるってことでいいんだよね？」

「はい！ えつと……」

「ああ、名乗ってなかったな、私は田井中律、パートはドラム担当だ。よろしくな！」

「私は琴吹紬よ、ムギでいいわよ。よろしくね、二人とも」

「は、はい！」

「…よろしくお願いします」

メンバーは唯先輩がギター、澁先輩がベース、律先輩がドラム、ムギ先輩がキーボードみたい。

「私、新歓ライブの皆さんの演奏を聞いて感動しました！これからよろしくお願いします！」

「おお…眩しい…」

唯先輩がそんなことを言いながら顔を覆っていた。

「……これ、入部届けです」

「ああ、明日からよろしくな！」

「…はいっ」「はいっ！」

入部手続きは出来たので私達は帰ることにした。

明日から軽音部の一員。

…頑張ろっっ



## 第二楽章 入部！（後書き）

キャラ崩壊していたらごめんなさい。

### 第三楽章 部活動！（前書き）

ううむ、忙しくてけいおんのアニメを見る時間が少ない……

と、とりあえず第三楽章、始まります！

### 第三楽章 部活動！

私達が軽音部に入った次の日、

私と梓は放課後になってすぐに自分の楽器を持って音楽室に向かっていた。

「桜！早く早く！」

「…梓、すごく嬉しそう」

「だって、楽しみにしてたから」

「…はりきりすぎて転ばないでよ？」

「子供じゃないんだから…ほら、早く！」

「はいはい…」

こんなになるくらいにあの新歓ライブで感動したのかな。

まあ、私も楽しみにしてたけどね。

そんなこんなで音楽室に到着。

「こんにちは！」「…こんにちは」

「お、元気いっぱいだな！」

「はい！放課後が待ち遠しかったです！」

「それじゃあ早速！」

「練習ですか？」

「お茶にするか」

「「ええっ!?!」」

お、お茶…?」

と、い、う、か、な、ん、で、音、楽、室、に、テ、ィ、ー、セ、ツ、ト、が、…

「梓ちゃんと桜ちゃんもどうぞ〜」

「…どうも…」

「あ、あのー、音楽室でこんなことして大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫」

と、そこで入り口の扉が開き、先生が入ってきた。

…これはまずいんじゃない？

「あー！あー…これは…」

「私ミルクティーね」

「ええっ!?!」

なんかさっきからこればっかり言ってる気がする…

というか、先生公認…?

「顧問の山中さわ子です。よろしくね」

「よ、よろしくお願ひします」「…よろしくおねがひします」

綺麗な人…

(猫耳とか似合いそうね…)

なにか聞こえた気が…

「お菓子もどつぞ〜」

「わーい」

「今日もおいしそ〜」

「それにしても、新入部員か〜春ね〜」

「春になって彼氏できました?」

「よ、余計なお世話よ!ほつといて!」

…こつって軽音部だよね…

これだと喫茶店みたいなんだけど…

「はあ…」

まあ、楽しんでいるところを邪魔するのもあれだし、アンプは通さないで練習しよう…

ひとまずチューニングしてっとな…

まだ作ってる途中の曲があったっけ…

くく

「あらっ？」

「お、何やってんだ？」

「…何って…練習…ですよ」

「何の曲〜？」

「えと、今自分で作っている曲…です」

「へえ〜。作曲もしてるんだ」

「はい…一応…」

「というか、後輩が練習しても練習しようと思わないのかな…」

「そんな話をしていると横から、」

「ギューイーン！！」

「…しるなああ…！！」

「ビクッ！！」

「ひええっ!?!」

どうやら自分も練習しようとしてアンプにつないでギターを弾いた梓が、さわ子先生に怒鳴られたみたい。

…というか、ギターの音でそんなに怒鳴らなくても……

「…う…ひっく…」

「さ、さわちゃんのアホおー!?!」

「だ、だって…静かにお茶したかったんだもん…」

「言い方ってもんがあるだろ…」

いや、だからここ軽音部じゃ…

「ごめんな、あの先生ちょっと変なの」

「おい」

「気にしないでね」

「さ、ケーキ食べよ?」

「ティータイムがウチの売りだから」

「…いや、売りとかそういうんじゃないよ…」

「…こんなのじゃダメです…!!」

うわっ、梓がキレた。

「皆さんやる気が感じられないです…」

「あ、いや…新歓終わった後だし…」

「そんなの関係ありません！音楽室を私物化するのもよくないと思います！ティーセットは全部撤去すべきです！」

「それだけは勘弁して！」

「…なんで先生が言うんですか…」

「と、とにかく落ち着いて…」

「これが落ち着いていられますか！」

おっ

「いい子いい子」

突然唯先輩が梓を抱きしめて頭を撫で始めた。

なでなで

「そんなことで納まるはず…」

「えへ〜…」

(納まったー！)

梓は昔からなでなでに弱いからね。

「取り乱してすみませんでした…」

「ううん、全然気にしてないから」

いや、少しは気にしてほしい。

「でも、梓の言うことも一理あるよ。私達ももっとやる気出していかないと！」

そういつて澁先輩は、

「わかりましたね！」

と唯先輩達にいった。

唯先輩達は「はい……」と渋々了解したように見えただけ、大丈夫かな？

### 第三楽章 部活動！（後書き）

ご指摘、ご感想お待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4266n/>

---

けいおん！ 桜

2011年2月22日13時39分発行